財団法人日本自転車競技連盟広報誌

自転車で公道を走る時は交通法規を守りましょう！

KEIRIN
この派遣は競輪の補助金を受けて実施されました

Cyclism echo
シクリスムエコー

www.jcf.or.jp

シクリスムエコー No.198
2013 アジア選手権特集号

男子ジュニアチームパーシュート決勝

日本が生んだ世界のスポーツ
KEIRIN

この広報誌は、競輪の補助金を受けて作成しました。

http://ringring-keirin.jp

チームパーシュート金メダル

トラックレース　ジュニア

【3月3日】

4日の朝の出発なので、午後7時に成田にジュニア選手全員集合。翌日からのスケジュール、各選手のコンディションの確認、ミーティングを行った。

【3月4日】

朝食を済ませて、エリート選手達とともに空港へ。11：00の飛行機で出発。およそ10時間のフライトで、インド・インディラガンディー空港に到着（現地時間19：00）。日本との時差は3時間30分。大型バス2台に、自転車・荷物を乗せて競技場へ行き、自転車を降ろし、ホテルに移動。夕食と明日の予定を連絡し就寝。

【3月5日】

指定練習時間は16：00～18：00まで。韓国と同じグループで人数が多く、思い通りの練習が出来なかったが、選手達は代表合宿等で各コーチから指導を受けていた事が生かせ、1月のユースオリンピック（オーストラリア）に続く2度目の海外遠征だったため要領よく進めていた。競技場は室内板張り250mバンク。修善寺の物よりコーナーが長くカントも緩い、やや円に近い競技場だった。少々癖があるようだが、大きな問題はない。

【3月6日】

練習時間は14：00～16：00まで。昨日同様に問題なく行った。その後、ホテルでマネージャーミーティングが行われた。ルールは変わらないが様々な事が国内大会と違うので、選手に説明しミスをしない様に指示した。

【3月7日】

○ 3kmIP 予選

鈴木康平（静岡・星陵高）、ジュニアチームのキャプテンとして個人種目最初のスタート。目標は30秒を切る事。自分で作成したラップ表で確認をして『頑張れ！自分』を胸に走る。結果3分31秒472で2位、決勝へ進んだ。

○チームスプリント予選

小さなミスが順位に大きく響く種目。1走:野上竜太(岡山・岡山工業高)、2走:久保田泰弘（山口・誠英高）、3走:岡本隼（和歌山・和歌山北高）の並びで出走。ミスをしないことを懸念していたが、2走3走ともに2m～3m離れてしまう。ここで岡本が無駄な足を使ってしまい48秒939で3位。午後の3、4位ファイナルに進んだ。（対台北チーム50秒217）およそ0秒5差で1位に届かなかった。1・2位は同タイム48秒447（マレーシア・韓国）3・4位ファイナルは特にスタートに集中をして予選タイムを上回り、メダルを獲得できるように声を掛け合い確認する様に指示。48秒417で予選を上回り、銅メダル獲得。

○ 1kmTT 決勝

チームスプリント3走を走った岡本が出走。本来1kmの選手ではないが、持久力とスピード共に兼ね備えた選手なので、自信を持って走る様に送りだす。1分07秒683の自己新記録で銅メダルを獲得した。

○スクラッチ決勝

森口寛己（和歌山・和歌山北高）が出場。同じ学校の岡本がメダルを獲得したのが刺激になり、エリートの飯島コーチから指導と走り方のレクチャーを受けて出走。韓国・香港・マレーシアなどの選手からのマークが厳しく、抜け出す事が厳しい。残り1kmを切り森口が先行態勢となったが、最終周残り3/4で内側から切り込んできたUAEの選手と接触転倒！DNF。幸い、帯同ドクターの金井先生が居られたので、救急車で病院に行き検査をしてもらい、異常なしの結果で本人も安心。明日のチームパーシュートに備えた。

ポイントレース金メダルの原井

【3月8日】

○ 3kmIP 決勝

鈴木とカザフ選手との予選タイム差は1秒742で勝てないタイム差ではないと、自信をもって望ませる。しかし予選よりタイムを落とし銀メダル。

○スプリント予選（出走13名）

タイムアタックが重要になるので、エリート坂本コーチにライン取りの指導を受けて出走。野上11秒192(3位)、久保田11秒250（6位）で両者とも1/8決勝に進んだ。

○チームパーシュート予選

鈴木、原井博斗(福岡･祐誠高)、岡本、森口。チームワークが重要な鍵をしめる。近年タイムを大幅に更新し、世界選手権でのメダル獲得を目標に選手・コーチがジュニア国内強化合宿で一番力を注いできた種目。スタートからペースに乗り切れずラップタイムにばらつきが出てしまい、残り1kmで3人の体制になる。さらに最終周で3走の選手も離れそうになり、ペースが一気に落ちてしまった。それでも4分23秒718で1位通過、11日の決勝へ進んだ。

【3月9日】

○スプリント1/8決勝

野上、久保田ともに勝ち上がり、翌日の1/4決勝へ進んだ。この日はスプリントしかなく、昼休みを利用してチームパーシュートの練習と確認を行い、その他の時間は休養時間にあてた。

【3月10日】

○スプリント1/4決勝

日本人対戦となってしまいお互いにやりにくい様であったが、野上が勝ち上がり明日の1/2決勝へ。

久保田はすぐに5～8決定戦へ。4名での対戦も主導権をとり、他国の選手を前に出さず逃げ切って5位確定。

○ケイリン1回戦

1組に久保田が出走、自分の力を出し切れず5位。敗者復活戦では先行されるも早めに自分から追い上げて1位になり、翌日の1/2決勝へ進んだ。3組の野上は後手を踏まない様に積極的に攻めて、一人にはかわされたが2位で1/2決勝へ進んだ。

【3月11日】

○スプリント1/2決勝

野上は1本目、車間を開ける相手の様子を伺い逃げ切り勝ち。2本目は相手に先行されて負け。3本目も前に出ようとするが出してもらえず敗退。3･4位決定戦へまわった。3･4位決定戦では自分のレースをして、ストレート勝ちで3位が決定した。

○ TP 決勝

今日まで日本チームに金メダルが無いため、昨日現地入りしたジュニアロードチームも応援に駆けつけてくれた。相手とのタイム差はかなり開いているが油断は出来ない。選手・コーチも新記録を狙いたい所だが、今回は勝利優先で相手（カザフスタン）に勝つことを念頭に入れてスタートラインに着いた。15秒50のラップで走る様に指示。相手も互角のラップを刻む。2～3kmの所で相手のペースが落ち射程圏内入り、残り1kmを切った時に追い付いて勝利。金メダルを獲得。

○ポイントレース決勝

原井は最初で最後の個人種目。チームパーシュートの金で俄然やる気を見せる。他国の選手もチームレースの走りを見て日本をマークしてきた。原井は落ち着いたレース運びで他をよせつけず優勝。2つ目の金メダル。

○ケイリン1/2決勝

野上の1組にはマレーシア2名、香港2名、中華台北と野上。同国同士がラインを作り思うようなレースが出来ずに後方におかれ、結果4位で7～12位決定戦へ。久保田の2組には韓国2名がおり、同様にうまくレースを作られて4位であったが、3位のカザフ選手の降格で決勝戦に駒を進めた。7～12位決定戦では、野上はスタートからペーサーの後ろに入り終始主導権を握り、1着でゴールして7位確定。続く決勝はマレーシアと韓国が2名ずつ居り、ペースを作る事が出来ずに後方からの勝負となり最後、外から行くが届かず4位となった。

【総括】

選手たちは全種目で優勝を狙っていたが、その中で重点種目となっていたチームパーシュートで金メダルを取れ

個人パーシュート銀メダルの鈴木

チームスプリント銅メダル

スプリント３－４位決定戦、銅メダルの野上

1kmTT 銅メダルの岡本

スクラッチ無念の DNF 森口

ケイリン 4 位の久保田

たことは大きい。その勢いに乗りポイントレースでも原井が優勝を飾ってくれた。

インドの環境は衛生的に良くなく、選手には体調管理に気をつけるよう指示していたが、各選手ともに自己管理ができて万全な体制でレースに挑めた。

アジアの状況を見ると、マレーシアがここ2，3年で非常に力を付けてきたのが印象的。聞くところによると選手たちはオーストラリアで生活をしており、エリート教育を受けているという。実際にマレーシアのコーチには2名のオーストラリア人コーチがおり、自転車競技の競技力向上に力を入れていることが分かった。一方、韓国や中国勢は驚くほど伸びてはいない。また開催国のインドの選手は、まだまだ日本のレベルに達してはいないが、今後の成長が感じられた。

日本のジュニアは2年ぐらい前から、毎月修善寺でジュニア強化合宿を開催している。チームパーシュートでは今後の世界選手権でも、メダルを狙える位置まできている。今年8月のジュニア世界選までには、4分12秒台を目標に成長してほしい。

（ジュニア強化スタッフ　山本 宏恒）

[競技結果]

<トラックレース男子ジュニア>

スプリント

1 MODH ZONIS, Muhammad Firdaus MAS
2 JUNG, Jeahee KOR
3 野上　竜太　岡山　岡山工業高校

5 久保田泰弘　山口　誠英高校

ケイリン

1 MODH ZONIS, Muhammad Firdaus MAS
2 JUNG, Jeahee KOR
3 KIM, Yeongsoo KOR
4 久保田泰弘　山口　誠英高校
7 野上　竜太　岡山　岡山工業高校

1km タイムトライアル

1 MODH ZONIS, Muhammad Firdaus MAS 1:05.758
2 KIM, Hyeonseok KOR 1:07.414
3 岡本　隼　和歌山　和歌山北高 1:07.683

3km 個人パーシュート

1 MAMEDOV, Magomed KAZ 3:28.826
2 鈴木　康平　静岡　星陵高校 3:32.039
3 RAZALI, Mohamad Farid MAS 3:34.701

スクラッチ（10km）

1 LAKASEK, Irwandie MAS
2 LAU, Wan Hei HKG
3 LI, Yi Lin TPE
森口　寛己　和歌山　和歌山北高校 DNF

ポイントレース（15km）

1 原井　博斗　福岡　祐誠高校 19p
2 XU, Xuan Ping TPE 13p
3 KIM, Hwanghee KOR 11p

チームスプリント

1 大韓民国 48.275
2 マレーシア 48.335
3 日本　岡本・久保田・野上 48.417

チームパーシュート

1 日本　鈴木・原井・森口・岡本 追抜勝
2 カザフスタン
3 マレーシア 追抜勝

トラックレース　エリート中距離

女子ポイントレース銀メダル上野

女子個人パーシュート銀メダル塚越

男子オムニアム銅メダル窪木

3月7日

個人追抜予選には、塚越と伊藤がエントリーし、二人とも52×15のギアでスタート。塚越は前半から良いペースで走り、課題の後半も何とか持ち堪え3分46秒362の大会新記録で1位通過。伊藤は後半ペースが上げられず、4分42秒158で7位で決勝に進めなかった。午後は上野がポイントレースに出場し、得意の逃げ展開に持ち込むも、前半の得点が少なく僅差の2位だった。アジアならではの展開に対応出来れば、十分優勝も狙えたので残念だった。

3月8日

午前中に団体追抜予選があり、女子は加瀬・上野・塚越・小島、男子は窪木・橋本・一丸・伊藤でエントリー。女子は加瀬が上手くペースを作り、1kmを1分10秒前後のラップでまとめ、4分46秒732の日本新で2位通過。男子も1kmを1分2～3秒でまとめ、4分14秒714のこちらも日本新で2位通過し、決勝に進んだ。フォーメーションやペースのバラつき等、走りの精度さえ修正出来れば、更なる記録更新も期待できると感じ、レース後修正点を指示した。

男子ポイントレースには橋本がエントリー。前半から積極的に仕掛け、韓国、イランと3名で抜け出すも、点の取り合いになりラップする事が出来なかった。中盤、中国と香港に1LAPを許し勝負は5人に絞られた。最後は終盤も得点を重ねた韓国が優勝。前半逃げで加点した橋本だったが、強みでもある積極性が裏目に出てしまい、後半の勝負所で加点出来ず5位に終わった。アジア選は参加人数が少なく、力が偏っているため、優勝するには終始安定した走りが求められる。今後のレースには良い試練の経験となった。

午後には塚越の個人追抜決勝があったが、スタートからスピードに乗せきれず予選から5秒も落としてしまい2位に終わった。国際レースでは1日に多くのレースを走る事も多く、安定した力を出す事が今後の課題の一つとして残った。

3月9日

男女オムニアムには窪木と上野がエントリー。朝一番のレースではいかに身体を起こせるかが重要なため、早めの起床と多めのウォーミングアップを指示。最初の種目フライングラップは上野、窪木ともにスピードに乗せきれず4位、8位に終わった。

次に団抜決勝が控えているので、気持ちを切り替る事に集中させる。男女とも記録更新はしたが、両チームともコンマ差で惜敗した。わずか2ヶ月でここまで記録が伸ばせたので、今後の強化次第では更なる記録更新が期待出来ると思えた。

午後はオムニアム2種目めのポイントレース。上野は韓国と中華台北にマークされたが、後半タイミングよく抜け出し3位に入った。続く窪木は序盤からのLAP合戦で4lapするも、中華台北の5lapに届かず2位に終わった。

次のスクラッチには塚越と一丸がエントリー。ともに後手の展開で9位、8位という結果に終わる。両者とも基本的な走力のアップが必要だと感じた。

本日最後の種目はオムニアムのエリミネーション。日本では走る機会が減っている種目なので、念入りに作戦を指示する。二人とも危なげなく走り3位、2位と実力通りの結果を残してくれた。

3月10日

今日は、オムニアムの残り3種目。女子3km、男子4km個人追抜、男女スクラッチ、女子500m、男子1kmタイムトライアル。連日の出場で疲労の色も濃いが、ここでの経験が今後の大会に必ず活きてくるのでここが踏ん張りどころだ。

まず上野の個人追抜はベストより遅い3分51秒002だったが、ライバル達のタイムが伸びず1位となる。ここでの1位は精神的にも非常に大きかった。窪木もベストには届かない4分39秒770だったが、4位に踏みとどまった。

続くスクラッチ、上野は終始マークを振り切れずラスト勝負で4位。窪木は2名の1LAPを許すもゴール勝負で頭を取り3位に入った。

最終種目のタイムトライアルは、上野が38秒235の自己ベストで3位、銅メダルとなった。終盤粘った窪木も1分7秒168で5位、韓国の追い上げをかわし同じく銅メダル。二人とも厳しい日程の中で、最後まで諦めずに良く走ってくれた。リザルトを振り返ると両選手とも課題として、展開に左右されないタイム系種目の強化を強く感じた。

今大会で日本記録を更新する事が出来たのは、選手自身はもちろんスタッフにとっても大きな自信となった。しかしまだこの記録では、スタートラインに着いただけである。選手、スタッフの信頼関係を更に深め、世界のトップを目指し一緒に歩んで行きたい。

（強化コーチ　飯島 誠）

男子ポイントレース５位橋本

男子スクラッチ８位一丸

男子個人パーシュート７位伊藤

[競技結果]

<トラックレース中距離男子エリート>

4km 個人パーシュート

1 JANG, Sunjae KOR 4:38.177
2 OMIRZAKOV, Dias KAZ 4:40.801
3 HAGHI, Alireza IRI 4:34.703
7 伊藤 和輝 東京 昭和第一 4:42.158

スクラッチ（15km）

1 CHO, Hosung KOR
2 NETEGHI, Hossein IRI
3 LIU, Chin Feng TPE
8 一丸 尚伍 大分 エカーズ・U23

ポイントレース（30km）

1 CHO, Hosung KOR 39p
2 CHOI, Ki Ho HKG 34p
3 RAJABLOU, Mohammad IRI 34p
5 橋本 英也 岐阜 鹿屋体育大学 25p

オムニアム

1 ZAKHAROV, Artyom KAZ 18p
2 SHAN, Shuang CHN 21p
3 窪木 一茂 和歌山 和歌山県庁 24p

チームパーシュート

1 大韓民国 4:10.689
2 日本 窪木・一丸・橋本・伊藤 4:11.103
3 ホンコンチャイナ 4:11.323

<トラックレース中距離女子エリート>

3km 個人パーシュート

1 KIM, Youri KOR 3:49.058
2 塚越さくら 鹿児島 鹿屋体育大 3:51.792
3 LI, Jiujin CHN 3:54.274

スクラッチ（10km）

1 KIM, Eun Hee KOR
2 TSENG, Hsiao Chia TPE
3 GONG, Xingyu CHN
9 塚越さくら 鹿児島 鹿屋体育大学

ポイントレース（20km）

1 WONG, Wan Yiu Jamie HKG 41p
2 上野みなみ 青森 鹿屋体育大学 36p
3 SOM NET, Ju Pha MAS 29p

オムニアム

1 HSIAO, Mei Yu TPE 10p
2 LEE, Minhye KOR 15p
3 上野みなみ 青森 鹿屋体育大学 18p

チームパーシュート

1 大韓民国 4:41.576
2 日本 上野・塚越・小島・加瀬 4:42.433
3 中国 4:44.824

トラック選手団

トラックレース　エリート短距離

男子 1kmTT 銀メダル稲毛

女子チームスプリント銀メダル

男子チームスプリント銅メダル

アジア選手権トラックレースは、インド・ニューデリーの屋内板張り、周長250m、参加国15ヶ国で開催された。日本からの短距離エリートは、男子:坂本貴史、稲毛健太、和田真久留、脇本雄太、女子:加瀬加奈子、中川諒子の6人である。

大会1日目は、男子チームスプリント予選。メンバーは、第1走和田、2走坂本、3走稲毛で、今回このメンバーで走るのは初めてで、現地に入ってからスタート合わせをこなして本番に備えた。予選はスタートで、坂本、稲毛が前走者から離れぎみのスタートとなり、苦しい展開となる。いまひとつスピードに乗りきれず、予想よりも悪い記録となってしまう。予選の結果、日本は3位通過となりタイと3位決定戦となる。

午後からの3位決定戦、日本チームは気持ちを入れかえ、ギアの選択を見直して戦いに臨んだ。決定戦では、スタートも決まり、1走の和田が18秒3とまずまずの走り。続く坂本も13秒4の好ラップで、タイチームに大差をつけ3位確定となる。

女子スプリント。200m予選で加瀬6位、中川7位となり1/8決勝で日本人同士の戦いとなる。1/8決勝、スタートから加瀬が先行態勢で中川を寄せ付けず、そのまま逃げ切りを決める。

敗者復活戦、中川の対戦相手は、香港選手とマレーシア選手である。中川はスタートから先行し、うまく逃げ切りを決めて1/4決勝へ。

大会2日目、女子スプリント1/4決勝。2組、中川は中国選手と対戦。200m予選2位の中国選手は、スタートから先行態勢で中川にレースをさせず、楽々と逃げきってしまう。3組、加瀬も対戦相手は中国選手で、加瀬はラスト2周半から先行態勢も中国選手にまくられて敗れてしまい、加瀬、中川両者とも5～8位決定戦へ。

5～8位決定戦。対戦相手は、韓国選手と香港選手である。スタートから中川、加瀬で続いて行くも、ラスト1周で香港選手にまくられてしまい加瀬7位、中川8位に終わる。

午後からは、坂本と和田の男子スプリント200m予選である。少しでも好タイムを出して、本戦で楽な相手と対戦したいところである。結果、両者ともベストタイムに及ばず、和田10秒640で6位、坂本10秒708で7位と本戦に進む。

大会3日目、男子スプリント1/8決勝。6組、和田の対戦相手は、格下の韓国選手である。アウトスタートの和田は、後方から前走の韓国選手の動きを観察したままラスト1周となる。韓国選手は1センターからそのまま先行。和田バックからラストスパートし、4コーナーで並びかけてゴールするも、僅かに届かず予選敗退となる。和田に関しては消極的なレースで、もう少し結果を恐れず積極的に動いてほしかった。

7組、坂本の対戦相手はタイ選手である。前のレースで和田の敗戦を見て、坂本に積極的に行くことを告げる。インスタートの坂本は、終始積極的な走りで逃げ切り1/4決勝へ進む。

大会4日目、女子チームスプリント

男子ケイリン 6 位の脇本

女子 500mTT、5 位小島

女子ケイリン 8 位の中川

女子ケイリン 4 位の加瀬

男子スプリント 5 位の坂本

男子スプリント 9 位の和田

第 33 回アジア自転車競技選手権大会／第 20 回アジア・ジュニア自転車競技選手権大会 日本代表選手団

大 会 名 第 33 回アジア自転車競技選手権大会／第 20 回アジア・ジュニア自転車競技選手権大会
開催場所 インド・ニューデリー
大会期間 2013 年 3 月 7 日～ 17 日　<トラック> 3 月 7 日～ 11 日　<ロード>　3 月 13 日～ 17 日
派遣期間 2013 年 3 月 4 日～ 3 月 19 日
代表選手団
監　督 坂本　勉（ナショナルコーチ）
コーチ 高橋 松吉（強化コーチ）・飯島　誠（強化コーチ）・村田 正洋（アシスタントナショナルコーチ）
山本 宏恒（ジュニア強化スタッフ）・柿木 孝之（ジュニア強化スタッフ）　ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ 沖　美穂（強化アドバイザー）
ﾒｶﾆｯｸ 森　昭雄（強化スタッフ）・藤原冨美男（強化スタッフ）
マッサー 柳　浩史（強化スタッフ）・森　典隆（強化スタッフ）・石田 宗男（強化スタッフ）
ドクター 金井 貴夫（支援ドクター）　総 務 貝塚 直子（事務局）
選 手 **<トラック>**
エリート 坂本 貴史（JPCA・JPCU 青森）・稲毛 健太（JPCA・JPCU 和歌山）・和田真久留（JPCA・JPCU 神奈川）
脇本 雄太（JPCA・JPCU 福井）・窪木 一茂（和歌山・和歌山県庁）・橋本 英也（岐阜・鹿屋体育大学）
一丸 尚伍（大分・エカーズ・U23）・伊藤 和輝（東京・昭和第一学園高校）・加瀬加奈子（JPCA・JPCU 新潟）
中川 諒子（JPCA・JPCU 新潟）・上野みなみ（青森・鹿屋体育大学）・塚越さくら（鹿児島・鹿屋体育大学）
小島 蓉子（千葉・日本体育大学）
ジュニア 鈴木 康平（静岡・星陵高校）・原井 博斗（福岡・祐誠高校）・森口 寛己（和歌山・和歌山北高校）
岡本　隼（和歌山・和歌山北高校）・久保田泰弘（山口・誠英高校）・野上 竜太（岡山・岡山工業高校）
<ロード>
エリート 佐野 淳哉（埼玉・VINI FANTINI）・西谷 泰治（愛知・愛三工業レーシング）・盛　一大（愛知・愛三工業レーシング）
畑中 勇介（東京・シマノレーシング）・與那嶺恵理（茨城・フォルツァ）・上野みなみ（青森・鹿屋体育大学）
塚越さくら（鹿児島・鹿屋体育大学）
U23 木下 智裕（神奈川・エカーズ・U23）・山本 元喜（奈良・鹿屋体育大学）・黒枝 士揮（大分・鹿屋体育大学）
六峰　亘（大分・ブリヂストンアンカー）
ジュニア 黒枝 咲哉（大分・日出暘谷高校）・吉田 優樹（福島・学法石川高校）・横山 航太（長野・篠ノ井高校）
山本 大喜（奈良・榛生昇陽高校）・坂口 聖香（兵庫・パナソニックレディースチーム）

予選。1走中川、2走加瀬のコンビで、経験の少ない二人であったが、抜群のスタートで息の合った走りをみせ、予選で中国に次ぐ2位で決勝に進む。決勝でも中国に敗れはしたが、大健闘な走りで銀メダルを獲得してくれた。

男子スプリント1/4決勝、坂本の対戦相手は予選で2位のタイムを出した各上の中国選手。スタートから積極的に先行策をとり、そのまま逃げ切りを決めるも、スプリントレーンを外したとみなされ降格となり、残念ながら5～8位決定戦へ。5～8位決定戦、坂本は1/4決勝での鬱憤を晴らした、見事な逃げ切りの1着ゴールで5位を確定する。

500mTTに出場した小島は、持てる力を出し切ったレースであった。これからさらに力をつけ、上を目指して頑張ってほしい。1kmTTの稲毛は1周目が19秒7秒と少し抑え気味でスタートするも、後半勝負を意識した走りでスピードが落ちずそのままゴール。自己新には少し及ばなかったが2位となる。

ケイリン1回戦。加瀬、中川両者ともラスト2周で先行し、ラスト1周でかましてきた選手の2番手を確保し、各組の2着ゴールで準決勝へ。

坂本はスプリントとのスケジュール的にハードな面が影響し、予選、敗者復活戦とも消極的な走りとなり、準決勝に進めなかった。このような大会でのタフさが今後の課題である。

脇本は経験が浅いため消極的な走りだったが、敗者復活戦ではその反省を生かし、ラスト2周半から先行し1着ゴールで準決勝へ。

大会5日目、加瀬が決勝4着、中川が7～12位決定戦で2着となり8位。加瀬、中川は積極的にレースを作り、位置を確保する力強い走りで今後、海外の大会を多く経験を積むことでさらに飛躍が期待できるであろう。

脇本は準決勝も得意の持久力を活かし、2周半逃げ切って決勝に進むも、決勝では得意の積極先行をさせてもらえず苦戦し、6着となる。

エリート短距離に関して、ロンドンオリンピック、2013世界戦、そして今回の結果から、リオオリンピックに向けて早急に強化計画をたてる必要性を感じた。（ナショナルコーチ　坂本 勉）

[競技結果]

<トラックレース短距離男子エリート>

スプリント

1 NG, Josiah MAS
2 VARPOSHTI, Hassanali IRI
3 CHOI, Lae Seon KOR
5 坂本　貴史 JPCA JPCU 青森
9 和田真久留 JPCA JPCU 神奈川

1km タイムトライアル

1 JUN, Won Gu KOR 1:03.904
2 稲毛　健太 JPCA JPCU 和歌山 1:04.816
3 HSIAO, Shih Hsin TPE 1:05.033

ケイリン

1 NG, Josiah MAS
2 PARASH, Mahmoud IRI
3 JUN, Won Gu KOR
6 脇本　雄太 JPCA JPCU 福井
15 坂本　貴史 JPCA JPCU 青森

チームスプリント

1 中国 46.576
2 マレーシア 47.163
3 日本　和田・坂本・稲毛 46.212

<トラックレース短距離女子エリート>

500m タイムトライアル

1 LEE,Wai Sze HKG 34.310
2 SHI, Jingjing CHN 35.088
3 MUSTAPA, Fatehah MAS 35.581
5 小島　蓉子　千葉 日本体育大 38.093

スプリント

1 MUSTAPA, Fatehah MAS
2 SHI, Jingjing CHN
3 LI, Xuemei CHN
7 加瀬加奈子 JPCA JPCU 新潟
8 中川　諒子 JPCA JPCU 新潟

ケイリン

1 LEE, Wai Sze HKG
2 MUSTAPA, Fatehah MAS
3 LI, Xuemei CHN
4 加瀬加奈子 JPCA JPCU 新潟
8 中川　諒子 JPCA JPCU 新潟

チームスプリント

1 中国 34.199
2 日本 中川・加瀬 35.731（予選:35.727）
3 大韓民国 35.540

ロードレース ジュニア

左から黒枝、横山、吉田、山本

今年のジュニアアジア選手権ロードには、1月末の選考合宿で選ばれた男子4名と女子1名が参加した。男子はゴール前のスプリント力とレースを読む目に長けている黒枝咲哉（日出暘谷高校）、どのようなコースにも対応でき、抜群のバイクテクニックを持つ昨年世界選手権、ドイツのネイションズカップを経験している横山航太（篠ノ井高校）、独走力とゴール前のスピードを持ち合わせた吉田優樹（学法石川高校）、平坦の独走力に長けた山本大喜（榛生昇陽高校）。女子は、平坦コースでは集団のペースが上がっても、男子集団の中に平気で入っていける力とテクニックを備えた坂口聖香（パナソニックレディースチーム）。昨年10月から5回の合宿で、選手同士の意思疎通もとれており、どのようなレース展開にも対応できる。日本チームとしてアジア選手権は、自分達でレースを組み立て、そして勝つことが求められる。

3月13日 ジュニア男子タイムトライアル

8時スタートの予定が、前日の監督会議で9時に変更。さらに現地に到着してからも、レース時間が変更になるか否かゴタゴタして、結局スタートしたのは9時45分。

ジュニア男子TTは1周14.2kmのコースを2周する28.4kmで、ありえない話だがレース中に選手同士が交差する箇所もあるコースだ。

男子ジュニアTTは17名参加で山本は後ろから2番目スタート。無線が使えるため、他の選手のタイム差を確認しながらレースを進めることが出来る。この日は風もなくバトンホイール＋ディスクホイールの装備。

スタート最初の3分は、最初の加速以外は絶対に強度を上げすぎないように注意する。直前合宿のTTでは、前半で上げすぎて中盤失速していたので、レース全体で、特に直線の長い平坦部分と緩い下り箇所で、高い出力を維持することを徹底する。また3か所あるちょっとした登り区間では、出力を上げすぎないように注意する。

1周目のサーキット周回を終えて外周に出るところでは、審判は立っているものの合図を出してくれないので、曲がる場所がよく分からず、ブレーキを大きくかけてしまいタイムを失う。それ以外のコーナーもどちらに曲がれば良いか分からず、またコーナー直後の段差で危ない場面もありタイムを失ったが、落車しなかっただけ良かった。平坦直線では非常にスピードに乗り、50km/hあたりで快調に回す。1周終了時ではカザフスタン選手に16秒差をつけられ2位。2周目からはコースも分かり快調に飛ばし続け、レース全体でみてもペース配分はうまくいった。

山本はカザフスタンのDmitriy Riveから12秒差の2位。惜しくも優勝は逃したが、ジュニア1年目で、コースも分からない状態ながら集中力を切らさずゴールまでしっかり走りきることが出来た。優勝したDmitriyは、昨年のジュニア世界選TTで14位に入った強豪選手であった。彼もレース中に突然現れた段差にハンドルをとられて、1回コースアウトしたそうだ。

3月15日 男子ジュニアロード

前日のミーティングでは、カザフスタン、香港、韓国との戦いになることを話した。特に今回強力なメンバーのカザフスタンは前半からアタックをかけてレースを厳しいものにしてくると予想される。レースは7周の99.4km。日本チームとしては、ラスト2周のテクニカル区間まで集団だった場合は、黒枝のスプリントにすべてを賭けることとする。ただアジア選手権の場合は逃げが決まる場合が多く、スプリントというのは最終的なオプションであり、複数名の、特にカザフを含む逃げは絶対に逃さないように注意する。黒枝のみはスプリントの脚を残すために、他の選手の半分くらいだけアタックに対応するように伝える。カザフスタン以外は、アジアのレースでは逃げが出来てもローテーションを拒否してくる場合が多く、他が牽かないようならその逃げは諦めて、次のアタックに対応していくようにする。集団スプリントの際には横山にラスト1.5kmのコーナーの多いテクニカル区間で攻撃させて、それによる逃げ切りが無理な場合でも集団はここで大きく分断することが予想されるので、黒枝が前にとどまれば最後スプリントで勝つことが出来る。

今回、直前に横山をキャプテンに指名して、レース中に攻めないといけない場面、守らないといけない場面では彼を中心に話し合うようにした。気になるのは、逃げの展開でも集団スプリントでも強力な牽引を期待できる山本が、TT後から体調を崩していること。

レースは19の国と地域、57名でスタート。スタートと同時にカザフスタンが4人全員で先頭に固まり、ペースアップ。2周目からカザフスタンがアタックを開始する。一時的に山本がカザフスタンと逃げる場面もあったが、日本チームで集団前方にいるのは横山だけで、日本には厳しい展開に。カザフスタンは複数名を逃げに乗せていこ

左から黒枝、吉田、山本、横山

うと、2名でのアタックや、カザフスタンを含む逃げにさらに単独ブリッジをかける動きを度々見せる。2周終了前に、カザフスタンの逃げにベトナムの選手が追いつき、20秒ほどのリードを得る。2名の逃げであり、まだ距離もあるので危険ではないが、次の追撃にカザフスタンが入り日本が乗り遅れたら致命的な展開のなかで、ウズベキスタンの選手が単独追走に成功し、先頭は3名になる。

この3名の逃げは日本チーム全員で追撃して、4周終了時には集団を一つに戻す。このあたりから集団は20名ほどになり、山本、吉田は集団後方になる。カザフスタンは攻撃の手をさらに強め、アタックを仕掛けてくる。ウズベキスタン、マレーシアにも勝負したい選手がいたため、日本だけで対応しなければならない状況ではなくなり、これには助けられた。そしてレース後半はカザフスタン対日本の戦いになってくる。山本と吉田は厳しいが、少しでもチームのためになるように、ペースが緩んだ時に前に出て働こうとしている。

6周目には横山とカザフスタン、ウズベキスタンを含む6名の逃げが決まり、後ろの集団が躊躇して決まりかけたが、カザフスタンがそこに後ろからブリッジをかけたため、集団もペースを上げて追いつく。この段階で集団は14名で、日本とカザフスタンだけが4名とも残している。最後のスプリントに絶対の自信のある黒枝も、疲れの見える他の選手を休ませようとアタックに反応している。

ラスト10kmを切り、ゴールスプリントでの争いが見え始めたころにカザフスタンが1名アタックし、それにもう1人のカザフスタンが反応。日本チームはこの攻撃を防ぐことが出来ず、一気にタイム差が20秒以上と広がっていく。ここで日本の選手らは優勝が難しいと判断し、3位争いに狙いを変更せざるを得なかった。集団では牽制が続く中で、ラスト1.5kmからのテクニカルな区間で、横山が当初の予定通り先行する。カザフスタンもメダル独占を狙い、狭いコースで対抗してくる。しかしテクニックに勝る横山がここでは勝ち、カザフスタンの選手はコースアウト。横山がそのまま黒枝を、ゴールまでの向かい風の中一人で引き続け、カザフスタンのスプリンターと黒枝の勝負に。向かい風の中で横山を最後まで風よけとして使えた黒枝が、短い区間で急加速して3位を獲ることが出来た。

レース前から今回のアジア選はチームで勝ち取ろうという意識の中で、最後は横山を中心に黒枝をアシストして3位を獲ることが出来た。レース後にコミッセール達から「素晴らしく攻撃的なレースであり、常にその中に日本選手が絡んでいた」と言われた。そして選手4名がレース後に、3位には全く満足しておらず、「チーム全員がしっかり機能していれば、勝つことが出来たレースであった」と悔やんでいた。

今回のカザフスタンのメンバーは昨年までと異なりネイションズカップに出てくる強力な選手達であった。彼らは全員が独走力を持ち、常に攻撃を仕掛けてくる。勝つことは出来なかったが、今回参加した4名とも次のネイションズカップに向けてすでに闘志を燃やしており、今回の負けをきっかけにどこまで成長するか楽しみである。

3月15日 ジュニア女子ロード

女子は14時半からの一番暑い中で、レースがスタートする。前日のミーティングでは、ゴールスプリントの際の位置取りと、逃げが出来そうな場合はそれに乗っていくことを伝える。

女子のレースは5周の71km。例年、集団のスピードが遅く、集団ゴールになる場合が多いので、坂口には選考合宿後にスプリント練習をしっかり行なってきてもらいたいことを伝えた。女子のレースで優勝候補となるのは、カザフスタンとTTチャンピオンの香港。

3周目までは単発のアタックがあるものの、タイム差をつけるほどのものではなく坦々と進む。危険なコースであるが、シクロクロス、マウンテンバイクもこなす坂口は、集団の前方で安全にこなす。4周目の中盤の追い風区間に入る前に、韓国のアタックに反応した香港が、一気に韓国を抜き去り単独アタックに成功。このアタックが強烈で、集団とのタイム差が徐々に広がる。それを坂口を含む5名で追撃開始。タイが2名いたが、まとまって追撃をする意思もなく、坂口が引いている時間が長く感じる。

ラスト10kmでタイム差が40秒以上に開き、こうなると2位を狙うしかない。坂口の集団でも後ろの集団が迫っていることを知った選手が、ようやくローテーションをしてくれるようになり、この5名での2位争いに。

逃げ続けた香港のPang Yaoが、牽制の入った2位集団に1分39秒差をつけて優勝。2位争いの追撃グループは、1.5kmからのテクニカル区間に入るところでばらけ、坂口は中華台北、ヨルダンとの3名でのスプリントに持ちこむ。コースが向かい風であったので、スプリントをゴール直前まで我慢するように伝えていたが、後ろが少し離れたのをみてとっさの判断で、ゴールまでのロングスプリントを決め2位となる。

女子ジュニア銀メダルの坂口

レース全体でも常に前をキープして、1名の逃げが決まった後もレース展開に乗ったのではなく、自分から追撃をして自分自身の力で2位を獲得したのは評価できる。坂口はジュニア1年目の選手であり、今後の更なる成長を期待したい。

（ジュニア強化スタッフ　柿木 孝之）

［競技結果］

男子ｼﾞｭﾆｱ個人ﾀｲﾑﾄﾗｲｱﾙ（28.4km）

1	RIVE, Dmitriy	KAZ		36:12.318
2	山本　大喜	奈良	榛生昇陽	36:24.222
3	EBADALLAHIRAFSANJANI, Mahdi	IRI		37:28.706

男子ｼﾞｭﾆｱﾛｰﾄﾞﾚｰｽ（99.4km）

1	PERNEBEKOV, Yerlan	KAZ		2:18:12
2	RIVE, Dmitriy	KAZ		2:18:12
3	黒枝　咲哉	大分	日出暘谷高	2:19:30

7	横山　航太	長野	篠ノ井高校	2:19:35
12	吉田　優樹	福島	学法石川高	2:19:39
15	山本　大喜	奈良	榛生昇陽高	2:21:47

女子ｼﾞｭﾆｱﾛｰﾄﾞﾚｰｽ（71km）

1	PANG, Yao	HKG	1:48:12
2	坂口　聖香	兵庫	ﾊﾟﾅｿﾆｯｸL. 1:49:51
3	SOBOH, Razan	JOR	1:49:51

男子エリートの盛

U23、5位の黒枝

ロードレース　エリート／U23

<個人タイムトライアル>

女子エリート 14.2km×2＝28.4km

上野みなみが出場。2組の最終スタートで目標タイムがあり、有利に戦える。スタート序盤はハイペースにならないように気を付け、ライバル選手のタイム差を見ながら走る。

4.5kmの中間地点ではトップ通過の韓国に15秒差、3位とは2秒差の4位で通過。ラスト9.2km地点ではトップのTuvshinjargal Enkhjargal（モンゴル）と9秒差で3位通過。優勝目指して力走するが、3秒遅れで惜しくも2位に終わった。

男子U23 14.2km×2＝28.4km

山本元喜が出場。2組の16番スタート、第1組トップタイムを上回るペースで走る。スタートから4.2km通過タイムは5番目通過。2回目の通過でトップタイムから1分以上の遅れ、3位とのタイム差は53秒。ラスト9kmの追い上げに期待したが、45秒差で4位。優勝はFominykh Danii(カザフスタン)。

U23 個人TT、4位の山本元喜

<ロードレース>

1982年にインドで行われたアジア大会以来31年ぶりのデリーは、大気汚染と自動車交通ルールの無法地帯で一般道は危険地帯と化し、トレーニング場所の確保が出来ない状況の中、ロード競技会場がホテルから片道60kmもあるF1コースで行われ、毎日移動で大変な大会であった。

U23の4名

男子U23 142km（14.2km×10周）

木下智裕、黒枝士揮、六峰亘、山本元喜の4名が出場。スプリンターの黒枝、木下をエースに序盤レースをコントロールしたが、ラスト6周回に六峰が落車した地点でカザフスタン2名、イラン2名、香港1名、ベトナム1名、フィリピン1名、計7名の逃げが決まる。

中盤から日本チームは追いかけるレース展開となってしまった。ラスト周回に入りトップグループは4名となり、メイン集団とのタイム差1分でのゴール勝負はイランが抜け出し、Khademi Ali（イラン）が優勝。メイン集団のゴール勝負は黒枝が1着でゴールして5位。1分53秒遅れで山本35位、木下36位。

男子エリート 156.2km(14.2km×11周)

佐野淳哉、西谷泰治、盛一大、畑中勇介の4名が出場。序盤インドネシアとマレーシア2名の選手が、集団から抜け出して逃げるが5周回で集団に吸収され、ラスト6周回、西谷を含む11名の逃げが決まる。

集団が3つの集団に分裂し、第1集団に西谷、第2集団に盛、第3集団に畑中と佐野が入っている。

ラスト3周回、ウズベキスタンの猛烈なアタックでトップ集団が分裂。西谷が遅れ第2グループに後退し猛暑のためか、突然の脱力感にみまわれそのままリタイア。最終周ウズベキスタンのHalmuratov Muradianがアタック、独走逃げ切りで個人タイムトライアルに続き優勝。

第2集団のゴール勝負で盛が5着に入り10位。なお、佐野と畑中は7周でリタイアした。

アジア選手権に向け調整し準備をしてきたつもりであったが、トップ集団の激しい戦いに付いていけなかった日本チームの力不足であった。

（強化コーチ　高橋松吉）

U23 木下

U23 山本

U23 六峰

男子エリートの西谷

男子エリートの畑中

男子エリートの佐野

男子エリート、スタート前の４人

<女子ロードレース>

與那嶺、上野、塚越の参加。前日のミーティングで今回はスプリンター不在なので、集団ゴールにならないことが、好結果の可能性が高いと話した。

Ｆ１サーキット14.2km×7周の99.4kmを、21の国と地域51名が14時30分34.5℃、湿度20%と言うカラッとした炎天下の中スタートした。スタート直後に積極的な展開をしたのは韓国で、次々とアタックを繰り返すが、すぐに集団に吸収されてしまう。日本は塚越、上野が前方をキープし、與那嶺は後方待機をしている。

スローペースの中、アタックがこまめにありインターバルの強弱がはっきりとしているが、アタックの距離が短く、すぐに集団となってしまうアジア独特の展開で進む。しばらく同じような展開で１周ごとに約１分位ラップが落ちて行き前日のジュニア女子同様のペースで大集団のまま進み、日本は３人とも前方から中団をキープする。

５周目、中国やベトナム、韓国からアタックがかかり、スピードが一気に上がって集団が一列棒状になった所で、後方の選手達が切れ28名となる。６周目も特に目立ったアタックはなく、ラストの７周目に入る手前のホームストレートで與那嶺が先頭を引き、最初の補給地点の登り坂に入り様子を伺いながら少し後ろに下がる。

目立ったアタックや逃げグループは出来ないまま、残り２キロで上野が落車に巻き込まれ、後ろにいた塚越も遅れてしまう。最終ホームストレートで５名が飛び出し中華台北、中国２名、韓国、ベトナムのゴールスプリントになりオムニアムで優勝したHISAO Mei Yu（中華台北）が優勝。日本チームは與那嶺の８位が最高であった。

敗因はゴール勝負にならない展開に出来なかった事、レース経験値が少なくレース展開を作れず、チームとして動けなかったこのレースをしっかり受け止め、今後リオに向けて色々なレースで経験値を高め、個々が意識の高い選手に成長していけるよう、今後も更なるサポートとアドバイスをして行きたい。（強化アドバイザー　沖 美穂）

女子エリートロード８位の與那嶺

女子、上野（右）と塚越

[競技結果]

女子ｴﾘｰﾄ個人ﾀｲﾑﾄﾗｲｱﾙ（28.4km）

1	TUVSHINJARGAL, Enkhjargal	MGL	39:27.303
2	上野みなみ　青森	鹿屋体大	39:30.090
3	WONG, Wan Yiu Jamie	HKG	39:42.824

男子ｱﾝﾀﾞｰ23個人ﾀｲﾑﾄﾗｲｱﾙ（28.4km）

1	FOMINYKH, Daniil	KAZ	34:27.855
2	TRINH, Duc Tam	VIE	34:37.079
3	IM, Jaeyeon	KOR	35:27.195
4	山本　元喜　奈良	鹿屋体大	36:09.960

男子ｱﾝﾀﾞｰ23ﾛｰﾄﾞﾚｰｽ（142km）

1	KHADEMI, Ali	IRI	3:04:18
2	KULIMBETOV, Nurbolat	KAZ	3:04:18
3	GURBUNOV, Vladislav	KAZ	3:04:18
5	黒枝　士揮　大分	鹿屋体育大	3:05:17
35	山本　元喜　奈良	鹿屋体育大	3:06:11
36	木下　智裕　神奈川	ｴｶｰｽﾞ・U23	3:06:30
	六峰　亘　大分	ﾌﾞﾘﾁﾞｽﾄﾝｱﾝｶｰ	DNF

女子ｴﾘｰﾄﾛｰﾄﾞﾚｰｽ（99.4km）

1	HSIAO, Mei Yu	TPE	2:38:06
2	LIU, Xiaohui	CHN	2:38:06
3	ZHAO, Na	CHN	2:38:06
8	與那嶺恵理　茨城	ﾌｫﾙﾂｧ	2:38:10
26	塚越さくら　鹿児島	鹿屋体育大	2:38:35
	上野みなみ　青森	鹿屋体育大	DNF

男子ｴﾘｰﾄﾛｰﾄﾞﾚｰｽ（156.2km）

1	HALMURATOV, Muradian	UZB	3:33:59
2	MOAZEMI GOUDARZI, Arvin	IRI	3:34:11
3	MIZUROV, Andrey	KAZ	3:34:16
10	盛　一大　愛知	愛三工業	3:36:38
	西谷　泰治　愛知	愛三工業	DNF
	畑中　勇介　東京	ｼﾏﾉﾚｰｼﾝｸﾞ	DNF
	佐野　淳哉　埼玉	VINI FANTINI	DNF

男子ジュニア個人TT銀メダルの山本大喜

女子エリート個人TT銀メダルの上野みなみ

ロードレースのメダリスト達

女子ジュニアロード銀メダルの坂口

男子ジュニアロード銀メダルの黒枝咲哉

＜JCFオフィシャル・スポンサー＞

PEARL IZUMI　ANCHOR　AEON　Kabuto　JINS　Meitan SuperAthlete　伊藤超短波　Toko Metal Multi Material Recycler　GOLDWIN　株式会社日商エステム

＜オフィシャル・サプライヤー＞

JAPAN AIRLINES　Vittoria　CYCLOCHANNEL シクロチャンネル cycloch.net

Cyclism ech　JCF

シクリスムエコー No.198　2013アジア選手権特集号

発　　行／財団法人日本自転車競技連盟
発 行 人／橋 本 聖 子
編 集 人／塚 本 芳 大
編集事務局／財団法人日本自転車競技連盟事務局
〒107-0052 東京都港区赤坂1-9-3 日本自転車会館内
TEL 03-3582-3713　FAX 03-5561-0508　http://www.jcf.or.jp/

KEIRIN

この資料および の表示がある事業は、JKAから競輪収益の一部である公益事業資金の補助を受けたものです。
© (財)日本自転車競技連盟2013本紙掲載の写真、イラスト、ロゴマーク、ロゴタイプおよび記事の無断転載を禁じます。
※本誌「シクリスムエコー」定期購読をご希望の方は編集事務局までお問合せください。

＝シクリスムエコー読者のみなさまへ＝　本誌についてのご意見、ご感想、ご要望等を編集事務局までお寄せください。